

ひびきジャーナル



編集／発行 特定非営利活動法人 純正律音楽研究会

〒106-0031東京都港区西麻布2-9-2 Tel 03-3407-3726 Fax 03-3797-5640 e-mail:info@pure-music.ne.jp

-対談-
玉木宏樹の
この人と響き合う

楽器学音律論研究者
野村満男さん

野村満男さんは名著『チェンバロの保守と調律』等で知られるチェンバロ調律の権威。高田ハープサロンの高田明洋さんがミーントーンのハープを制作するにあたり相談ののっていたいただいたのがご縁で、前号にCD『春へのあこがれ』へのレビューも寄せていただきました。今回は玉木宏樹がお話を伺うために、野村さんの近著『モーツァルトファミリーのクラヴィーア考』を片手にご自宅にお邪魔しました。メンデルスゾーンのコーラス作品が流れるお部屋に迎えて頂くやいなや、熱い対談が始まりました。

野村満男（のむらみつお）（右）

旧満州国新京で少年時代を過ごす。高知大学で理科、東京芸術大学で作曲を学ぶ。元東京都立芸術高等学校教諭、東邦音楽短期大学講師。作曲・編曲、楽器学、音律論研究、チェンバロ製作。

玉木宏樹（たまきひろき）（左）

一九四三年生まれ、神戸市出身。東京芸術大学ヴァイオリン科卒。純正律音楽研究会代表。作曲家・ヴァイオリニスト。

「モーツァルトの調律Ⅱヴァロッティ」説を検証する

野村 二年前に『モーツァルトファミリーのクラヴィーア考』を書きました。モーツァルトブームで話題になるかな、と思うとそうでもない。日本におけるモーツァルト受容は文学的です。小林秀雄に代表されるような解釈で、交響曲四十番を「疾走する悲しみ」という。日本人はそう言わないと納得しない。私は文学的な表現を避け、鍵盤楽器から見たモーツァルトを書きました。

調律研究からみえる音楽のパワー

玉木 モーツァルトとオペラは不即不離なのにあまりオペラは語られていませんしね。しかし、ご著書はたいへん勉強になりました。モーツァルトがヴァロツティだと、僕は野村さんの本を読むまで思いもよらなかった。ご他聞に漏れず私もケレタートでキルンベルガーにまみれていました。そういう人は多いですよ。

野村 そうなんです。ケレタートは権威のある名前ですから、みんな影響されていますね。でも、キルンベルガーは#が2つも付いたら使い物にならないです。万人向けの簡便調律法なのです。

玉木 平島達司さんも『ゼロピートの再発見』(シヨパン刊)でヴァロツティがいちばんいいと書いています。私はそんなところまで読んでなくて、読み直して気が付いて、驚きました。

野村 私が『チェンバロの保守と調律』(一九七五)を出してまもなく、関西のヴェルクマイスターにすっかり参っている人から電話がありました。後から思

うとそれが平島さんでした。

玉木 平島さんは著書の中でも前半はヴェルクマイスターのこつばかり書いているので、ヴェルクマイスターの支持者だと思っていました。

野村 それについては、後ほどお話しますが、まずはこれ(「ヴァロツティ音律による調和性のイメージとモーツァルトのクラヴィーア使用長調曲調性の分

布」右図)をご覧ください。そ

の本を書くにあたり、私が発見したものです。モーツァルトが書いた長調のクラヴィーア、つまり最初から調律で制約される鍵盤曲百七十七曲の中で使った調性を調べ、その和を中心から放射状に棒グラフで示したものです。ハ長調がいちばん多く、その次がハ長調でフラット系が多い。それが、ヴァロツティの

調和度の高い所、外側の円の色濃い部分と、びったり一致する。対象となる曲はソナタ、協奏曲が多いですが、そのなかのメインの調で統計を出しては、2楽章、3楽章については統計に入っていませんが、古典のソナタでは近親調なので、こういう数字を補強するだけだと考えられます。これには確信を持っています。

それでは、ヴァロツティで調律したモーツァルトのハーモニーの状況を聴いていただきましょう。

(野村さんがヴァロツティに調律されたチェンバロと平均律のピアノで各調をひき比べ。以下の対話を分布図の棒グラフと見比べながらお読み下さい。)

野村 K545の5度循環を全ての調で弾いていくとよくわか

ります。

Cidur (ハ長調)・Gidur

(ト長調)・Didur (二長調)

野村 キルンベルガーではもう駄目です。

Aidur (イ長調)

野村 ちょっと質が悪くなりました。

玉木 そうですね。

Eidur (ホ長調)

玉木 だいぶ落ちますね。

Hidur (ロ長調)

野村 落ちますね。このHがピタゴラス長3度ですね。

玉木 だめですね。

Fidur (嬰へ長調)

野村 これもピタゴラスです。

Desidur (変二長調)

玉木 まあなんとか我慢できるかな。

Asidur (変イ長調)

玉木 だんだんよくなってきましたね。

Esidur (変ホ長調)

玉木 モーツァルト多いですね。

野村 C-m-o-o-r (ハ短調) もありますね。

玉木 破綻なしですね(笑)。

Bidur (変ロ長調)

野村 Bidur も多いですね。

Fidur (へ長調)

野村 最も完璧です。平均律ではこうはいきません。

玉木 私はEsidur がいちばん好きでしたね。Bidur も

Fidur もいいけど。陰影的にはEsidur がいちばんある

ような気がします。深みがあります。調性の色彩感において

ちばんいいみたいだな。

野村 だからクラヴィーア短調

曲はC-m-o-o-r が好きだった

んじゃないでしょうか。とにかく

くヴァロッティでは属7の第7

音が非常にいいです。

玉木 ちょっと試させて下さい。

(玉木ヴァロッティの挑戦。)

野村 国民楽派くらいまでは十分使えます。

玉木 (弾きながら) ドビュッ

シー「月の光」は五音階風ですからね。なるほど。これはつかえますね。

調律研究にまつわるエピソード

玉木 野村さんがチェンバロの

調律研究に取り組まれるようになったきっかけについてお聞かせ下さい。

野村 私が最初に教員になって

赴任したのが新設高校だったんですけど、わりと予算が潤沢で、

最初の3年間で2管編成のオー

ケストラを作りました。初年度、

最初に買ったのはコントラバス

でした。重低音をどんと出せば、

上の雰囲気も出る。ハーモニー

も決まる。そうすると、一期生

で入ってきた生徒がすっかりコ

ントラバスに魅せられて、今で

は芸大の教授です。チェンバロ

製作家になった生徒もいます。

高校時代の音楽的インパクトが

人の人生支配するものなんだな、

と思いました。

当時、高校生に与える音楽は

何がいいかと考え、オーケスト

ラもいいけど、バロック音楽が

教育上よろしかろうということ

で、テレマンや、ブランデンブ

ルグの4番など、片っ端からや

りました。そのためには、チェ

ンバロは自分で作るしかなく、

準備室でゴシゴシ作りだしまし

た。それが初めてです。チェンバロについては、調律法や演奏法などを教えてくれる人はゼロです。自分です。自分です。自分です。先年亡くなった製作家の堀栄蔵氏も同じころスタートして、たびたび研究のため来校されました。

平島さんは、フォーゲルとい

う人が、日本オルガン研究会の

招きにより講演会で調律法の説

明をしたとき、ほとんど理解で

きなかった、と『ゼロビートの

再発見』に書いています。私は

その講演を聞いていませんが、

聞いた人のノートをみると、す

ぐ理解できました。そのとき紹

介されたヴェルクマイスターは

またちょっと違っていました。

そのあと、ヴェルクマイスタ

ー、キルンベルガーを『チェン

バロの保守と調律』で日本で初

めて紹介しました。それに平島

さんは注目しました。ところが、

それに書いたヴェルクマイスターはシントニックコンマ4分の1で、スキスマ分をどこかにはさむことによって、オリジナルよりずっと適合性が良くなるんです。それを平島さん、最初にピアノで実験されてびっくりされたわけです。でもよく研究してみたら、そもそもヴェルクマイスターはピタゴラスコンマ4分の1です。それでは、ぐっと成績が悪くなります。

(※8ページ用語解説参照)

玉木 スキスマじゃないと駄目だとお書きになっていますね。

野村 駄目というよりも、スキスマがある場所に挟むことによって、より多くの調への適合性アップという延命効果がでます。ヴェルクマイスターそのものがシントニックコンマであろうがピタゴラスコンマであろうが、4分の1でCからスタートして、途中純正をはさんで、またシントニックコンマまたはピタゴラスコンマを入れる。純正を中に挟むというのがミソです。それと同じような効果で、シントニック4分割ですと余りのスキス

マ5度をどこかにはさむことで、オリジナルより調和度が良くありません。それを最初の本で紹介した、というのが、間違いの元だったんです。平島さんの最初のとっかかりは私の本だと思えます。あのときはオランダに留学した人が、こんな調律法があるよ、ヴェルクマイスター第3つていうんだよ、とメモ的に教えてくれたもので、『保守と調律』の補遺編で、それを説明しながら、訂正しました。オランダ留学の人もシントニックコンマで持ち込んでいた。学究的に調べたわけではなかったものです。補遺編でそれをちゃんとやりました。

玉木 平島さんは最初の野村さんのご本に影響されて書いてらっしゃる。

野村 そうですね。それをピタゴラスコンマの、オリジナルのヴェルクマイスターにしちゃったものだから。私もヴェルクマイスターの評価について、横浜の調律師協会でも講演したんですけど。オリジナルのピタゴラスコンマでやったら、平均律が

調子悪く狂ったような効果しか出ない。シントニックコンマでぜひやってくれ、ヴェルクマイスターの良さが一段とよくわかる、と話しました。でも今はヴァロツティです。

玉木 ヴァロツティがいいのはよくわかりますよ。野村さんの他に、ヴァロツティを推進している方はいらっしゃいますか。

野村 プロの調律師では、ほとんどいません。演奏家では、ピアニストの内田光子、彼女は勲章をもらいましたが、その功績にヴァロツティも貢献しているのでは、とにらんでいます。

玉木 出版社シヨパンの内藤さんが、平島さんの『ゼロビートの再発見』の編集をやっていたんだけど、その巻末に資料として読売新聞夕刊（昭和五十七年十一月二十七日「内田光子さんの果敢な挑戦 幻の古典調律法華麗な復活」）の記事を引用したら、内田さんが、職業上の秘密をばらした、とものすごく怒ったそうなんです。

野村 本当ですか。モーツァルトならあれしかない。内田さん

は古典調律先進国の英国育ちですから、当然実践されています。秘密になさることでもないでしょうに。

玉木 一般の人はそんなこと知らないですからね。内田光子のピアノを聴くと、さすがウィーンのタツチだと言っただけです。

野村 もちろん、さすが内田光子の音楽だなんていうのは、ありませんけどね。

玉木 でも実は調律を変えていくことが大きい。しかし、それを指摘されて怒っていたら、古楽の人やっていけないですよ。

野村 今は時代がかわっています。それは古い発想ですね。適正な調律でハードとしてのピアノの性能もアップしたかのような効果がありますから。

玉木 内田さんはヴァロツティなんでしょう。いわゆるミントーンではないですか。

野村 ないですね。ミントーンは絶対、ウルフがでます。6分の1であろうと、4分の1であろうと。モーツァルトの鍵盤曲はひけません。

玉木 ミントーンで、トルコ

マーチの3楽章やると、あのA minor (イ短調) だけでもものすごくひどいですからね。

野村 大体、Es (変ホ) と Gis (嬰ト) にウルフをもっていくというのがミーントーンの昔からのやり方です。ミーントーンは確かに、ゼロビートで多くの長3度が美しい。しかし、

バッハ自身、ドミの長3度は純正にする必要はないとキルンベルガーに指導しています。にもかかわらずキルンベルガーは言うこときかなかった。そういうキルンベルガーのこだわりも人間的にはおもしろい。でも実用性はキルンベルガーはぐっと落ちます。

玉木 高田明洋さん(高田ハーブサロン)は、ご自分で工夫して、アイリッシュハーブをミーントーンにされました。縦割りの音は本当にきれいだと思います。だけど、それで教会旋法には対応できるでしょうか。

野村 教会旋法は中世に成立したことを考えるとピタゴラスじゃないでしょうか。

玉木 僕も基本的にはピタゴラ

スじゃないかと思えます。そうになると、2声対位法、3声対位法くらいで、縦割りのボロンの入る余地がなくなってしまう。

野村 もうちょっとつめて研究しないとダメですね。

玉木 メロディはヴァイオリンのピタゴラスでやって、ボロンというハーモニーのところはミーントーンでカヴァーしていくという方法はありますね。

野村 そうですね。ここぞというハーモニーの要所はミーントーンでやるといいと思います。

玉木 ミーントーンの音階でメロディやると気持ちよくないです。

野村 そうですね。半音階なんて特に。「何だこれ？」となります。

玉木 53等分律についてはどうでしょうか。『古楽の音律』(東川清一編・春秋社・2001)

という本で、東川さんは純正長3度が出ないから、53等分律の方がいいと思う、と冒頭に書いてあり、55等分律のことはあまり書いていません。

野村 53等分に関して、精密

な、55等分より数値的にまとめることができます。55等分というのは簡便で、当時の音楽家もっぱら大きい半音、小さい半音を説明するのに便利なものでした。

玉木 なるほど。確かに55等分は感覚的に使える数字になっているように思います。増1度と短2度の違いが1コンマと4コンマと5コンマになるというような、数字を目で見える簡便さがありますね。

野村 そうですね。53等分律は理論上、数字あわせです。数字ではうまく説明できる。昔の音楽家にとって実際面では55等分律なんです。

玉木 ヴァロッティはよくヤングと一緒にされますね。

野村 ヴァロッティとヤングは違います。

玉木 そうですよ。住んでいた場所も文化も風土もちがうのに。ヤングはイギリス人、ヴァロッティはイタリア人、交流はなかったでしょう。

野村 6分の1が出発する場所がツェーであればヤング、エフ

だったらヴァロッティ。これが大切です。だからモーツァルトのクラヴィーア曲の調性はフラット系に多く傾斜している。

コンピュータと調律の可能性

玉木 シンセサイザーをコンピュータコントロールで属7の9度と増11度の基音C(ド)のハーモニーを、7つの音律で録音したものを持ってきました。聴いてみてください。

(玉木が持参MDをかける。)

- (1) 12等分律
- (2) ピタゴラス増4度
- (3) ヴェルクマイスター第3
- (4) キルンベルガー第3
- (5) ミーントーン
- (6) 純正律
- (7) 自然7度を含んだ倍音音列

玉木 (7) がいちばん、和音としてはきれいです。

このシンセサイザーのコンピュータのコントロールはすごいことができるんですよ。半音を8190等分できるんです。

野村 オクターヴを1200等分できれば十分だと思ったんですけどね。

玉木 コンピュータで作るときは、1200セントの8190等分で十分です。そうでないと計算が面倒になるから。

野村 そうですね。

玉木 ただ、近似値としては相当なことができます。

野村 色も2万何千色とコンピュータはできますけど、すぐ隣にある色の变化って、人間そこまでわかるかな？と思います。

玉木 はっきりいってわかりませんよ。でも4000にするかわかりますからね。おもしろいことがいっぱいできます。シンセの音は好きじゃないけど。数字かませて、変化をさせる、ワントラックごとに少しずつ微分音的に高くなったものを同時演奏できるし。結構いろんな可能

性があると思います。

野村 このMDでは、C(ド)を基音になさっていましたけど、

ヴァロッティでわかるように、基音をどれにとるか、で、同じ7のコードも性格が変わってきますね。サークルで変化しますから。キルンベルガーはCからはよかったけど、D(レ)から

やったらどうか、という問題は起こってきますね。

玉木 Dを基音にしたとしても、そのままシフトアップすれば同じことになる。調性感が変わることはありません。全体のシステムをDに持ち上げれば、Dが

根幹のものになります。

野村 なるほど。昔の教会旋法みたい。同じ幅でかわっていくんですね。

玉木 調性感の違いとしてはおもしろくないかもしれません。

野村 色彩感が失われます。

玉木 ほんとうはその時代でも、同じ移調ができるなら、飛びついたんじゃないかな。

野村 アンサンブルはそうだと思う。しかし、鍵盤楽器がはいるとそうはいきません。チェン

バロとフルートの合奏をするとき、フルートはアンブシャーで合わせる事ができた。鍵盤がどういう調律だったか、がまず確定しないといけない。ヴァイオリンもすぐ鍵盤にあわせないといけない。

玉木 野村さんは、ヴァイオリンは何でもあわせられるから、調律の話には不向きな楽器である、と書いていらっしやいますね。それは大いなる認識違いだと思いますね。そんなことできる人はいません。

野村 それは演奏者の能力の問題ですか。

玉木 そうです。原理的にはそういうことができるかもしれない。実際にやっているかという、やっではないと思います。

音楽の力と生命の力

玉木 今日はハーモニートレーナーをもってきました。

野村 これは知らなかったですね。

玉木 もう生産されていないものです。これが純正律、これが平均律です。オープンにすると

違いがよくわかります。オクターヴあげると、こんなイヤな音がする。

(実演) 目盛りが1セントで、耳でどこがゼロビートになるか、訓練できます。自信がなければ針で確認できます。なかなか訓練するにはいいんじゃないかと思えます。

野村 よくできていますね。

玉木 野村さんは、5度の違いが皆わかんないだろう、とお書きになっているけど、これがわかるんですよ。これが平均律。このソの高さ。700セントと701・955セントの違い、

小さいからわかんないだろうと言われるけど、こんなにわかるんですよ。

野村 即比較すればわかりますけど(笑)。それにお言葉ですけど、音源そのものがかなり倍音を含んでいる、ぶつかりあうのが上の倍音のぶつかりあいである。もしこれが音叉的な音であれば無理ですよ。

玉木 サイン波の音は無理ですよ。倍音を含んでいないと意味がない。

野村 倍音のぶつかりあいを感じるんです。サイン波でしたら接近した二音のヘルツ数の差だけビートが出ます。ですから、これを開発するとき、どういう音源にするか、音色にするか、考えたんだと思います。

玉木 この器械で純正律を説明してディレクターに納得してもらい、制作したのがCD「ピュ



《ピュアスケールミュージックによる理想的ストレス解消》
Sedative Music by Jari Saarikoski

アスケールミュージックによる理想的ストレス解消」(ソニーレコード)です。聴いていただきましたが、どうでした？

野村 おもしろいですね。玉木 世界中にない方法論でやりました。あれはムキになっているんですよ。

野村 実際、音化するのに手間はたいへんだったでしょう。

玉木 ええ。でも、どの本を読んでも、純正律は幻想だ、絵にかいた餅だ、だってレトラがつかえない、っていうわけです。本当にそうなのか、高いレトラ、低いレトラ、4つ用意すればできるはずだ、とムキになってやっています。レ、ラ、ファ#、

ソ#の位置は色々ありますが、ある程度限定していけば、C、F、Gの3つのキーの中で限定された転調しかやらないのであれば、Dur(長調)であればできるということに自信を持ちました。何もワグナーのような調性崩壊寸前の音楽は純正律でやらなくていいんだし。開放弦のみのハンドベル状態でやれば、ものすごくきれいな音がで

ますから。

野村 私もそういう言い方をしますが、それは鍵盤曲に限って、鍵盤調律との関連で申し上げているんです。アンサンブルの人は大いにやってください、ということになります。

玉木 かつて、日本では、みんなが全く純正律なんて見向きもしなかった。でもバブルがはじけて、そうするとみんなが癒しをもとめて、ヒーリングミュージックというのがやりはじめた。でも、あやしげなのが多くて。そんな中、やっと純正律でやろう、と言ってくれたディレクターがいました。実験で、ハーモニートレーナーで平均律から純正律にきりかえると、被験者の脳波にアルファ波が出たんです。ディレクターがアルファ波にこだわっていたので、それで企画が通りました。監修は医学博士にお願いしました。

野村 この前NHKの番組で、お笑いをきくと免疫力があがる、笑いヒーリングを紹介していました。血液から科学的に証明して、DNAが活性化すると。音

楽でも検証すればきつとあると思うんですよ。DNA学者に協力してもらって、実際の曲の中で比較してみると、免疫力アップ、という証明が、やればきつと出ると思うんです。その段階でブレイクするんじゃないかと。十九世紀の科学技術がこれからの時代にも、先端的な研究の中に音楽がちゃんと含まれている。ヤングやオイラーが出てくるし、ニュートンの遺稿にも音律に関することが書いてあるそうです。先端の学者が音楽にとりくんできているということ、それはいかに音楽にパワーがあるかということ。それを日本はなんと粗末にしているんだろう。日本人は音楽を大事にしないといけないと思います。世の中おかしくなつたのを救うのは音楽じゃないかと思えます。

この前、小学校の先生や高校の先生と話す機会があったのですが、今高校では主要科目が幅をきかせて、芸術が追いだされようとしているそうです。音楽の力を教育が認めていないと感じることが多いです。音楽に喜怒哀

哀楽の感情をもたらす精神作用があること、これは重要なチェック項目です。受験教育で美しい心を育てることはできません。逆です。もっともドイツ、オーブリーでは、音楽の授業はないみたいですね。音楽の塾のよなものがありますけど。

玉木 ある本を読んでびっくりしたんですけど、フランスでもやはり、日本と同じで「政府は音楽に理解がない」というんです。しかしフランスは、義務教育に音楽がないということに対してそう言っているんです。政府の取り組みという面からすると日本よりも遅れているようにみえます。でも、毎週教会にけば、ミサ曲をやっているし。少年少女合唱隊もありますし。野村 そこでゾクツとするようないい響きを聴くわけですからね。

また先日、大根がアスファルトから出たという報道があり、毎日新聞の論説で、「まさか自動車の振動でそうなったとは思えないけど。」と書いてありました。私に言わせれば、どーんと

いう自動車の脈動を大根が感じて反応したんじゃないかと考えます。

玉木 あるかもしれないですね。野村 自動車の低音、どーんと音はファンダメンタルで倍音もともなっていますし、音で細胞が活性化します。大音響を間近で聴くと汗が出ます。地方伝承ですが、田植え作業で太鼓を打つという行事も意味があることです。

玉木 タイの大津波のとき、象がいち早く感知して、逃げ出して、しかも村人を救ったという。そんなことあるのかな、と実験したら、象は足の裏でものごく微妙な振動を感じるらしい。象の足の裏はスポンジみたいになってる。人間よりもずっと響きを感じるようになっているんですね。

野村 津波は遅れるけど、音、固体を伝わる振動波は、動物達に早く感知されると思えますね。宇宙でさえも何億年もかかって1振動している、なんて報告もありますし。これは私の勝手な解釈ですが、それでもって宇宙

の配列が成り立っている、我々もその波動の影響を受けている、ということはあると思うんです。

玉木 ケプラーの法則も、ちゃんと倍音的な関係で把握すれば説明がつく。それを音で表現すればすごくいい音楽になるんじゃないかと思えます。あれを平均律でやっつては駄目だ。

野村 平均律は確かに便利、簡便なんですけど、もっと「ああハモッてるなあ」と感じる心地よい調律法があることは確かです。少なくともモーツァルトがいいぞというのは、ヴァロッティに限りません。

玉木 私もヴァロッティは今まで使っていないので、数値を調べて試してみます。(了)

用語解説

コンマ 大きな音程同士の間にある微妙な音程の差。

(1) ピタゴラスコンマ

これは7オクターヴ上に12個の5度をとると生ずる余剰。約24セントト。5度圏内でこの差

を吸収し整律するとエンハーモニックとなる。

(2) シントニックコンマ

80:81。これは大全音

(8:9) と小全音

(9:10) との間に存在する差。約22セント。

ピタゴラスコンマとシントニックコンマの差がスキスマである。

※ヴァロッティなどの調律については、対談中に登場する文献をご参照ください。

紙面の都合で対談の全てを紹介することができず残念です。2005年に古楽の世界の話題をさらった、やはりヴァロッティやヤングの6分の1コンマから始まるバツハ調律の発見について、ヴァイオリンの調弦、音程、奏法について、調律を含めた社会的背景からみる音楽史など、今後掘り下げて再度取り上げたい興味深いテーマもありました。また、チェンバロを中心とした企画などもぜひ実現したいと思えます。

文責 純正律音楽研究会事務局

音楽療法の分野でも注目される純正律音楽



音楽之友社
『theミュージックセラピー』

音楽之友社発行の音楽療法専門誌『theミュージックセラピー』vol. 8(二〇〇五年十一月発行)にて、玉木宏樹の寄稿による「純正律音楽の効果」が、3ページにわたり紹介されました。介護老人保健施設はまなすでの活用例にはじまり、純正律と平均律の違い、シンセサイザーや邦楽器の使用の可能性、今後の純正律音楽の音楽療法の分野における展望などについて詳しく書かれており、様々な反響がありました。

音楽療法の歴史と現在
玉木 音楽療法というのは、いつ頃から始まったものなのでしょうか。芹澤 アメリカでベトナム戦争以降、急に発達したように思います。傷付いた兵士達の心のケアをしていくために使われたという経緯があります。たくさん戦争をしている国で音楽療法が発達してきた、というのは少し皮肉な感じもします。

玉木 日本ではいつ頃から音楽療法が盛んになりましたか。
芹澤 盛んといえるのは、ここ十年ぐらいだと思います。
玉木 みなさんも音楽療法という言葉はご存知ですよ。どんなことかはわからなくても、一般的に言葉として定着しているとは思いますが、言葉だけでも皆さん知っているというの、音楽がそもそも癒しの力を持っているもので、それを皆さん自然に認識しているからだと思います。

玉木 それはありますよね。歴史を紐解くと、ギリシャ時代から音楽と体のつながりについて研究さ

れています。プラトンでもアリストテレスでも音楽にとっても詳しくあった。

現在、音楽療法には何名ぐらいが携わっていらっしゃいますか。
芹澤 日本音楽療法学会というのがあります。音楽療法を教えている方から学生さんまで含めて、会員は六千人くらいです。音楽療法士という学会認定の資格の有資格者が千人くらいいます。

玉木 日本音楽療法学会は日野原重明さん(聖路加国際病院名誉院長)が理事を務められている団体ですね。国から認められた法人なんでしょうか。
芹澤 それを目指して活動していると聞いています。音楽療法士も現在は国家試験ではありません。

玉木 音楽療法士になるには、どうやらたかなれるのでしょうか。
芹澤 教育機関が音楽療法士の養成を始めています。音楽大学の中に養成過程もあり、専門学校もあります。

玉木 私は今、洗足学園音楽大学で講師をしています。洗足にも音楽療法のコースがありますね。
芹澤 はい。洗足学園音楽大学はアメリカ流ですね。ノードフ・ロビンズ音楽療法という、ひとつの

様式です。

玉木 日野原先生とはまた違う方式ですね。JASRACが音楽療法を支援していますが、いろいろな団体があるのにもかわらず、日本音楽療法学会一団体だけに助成しているのは問題だと思います。

芹澤 外国では音楽療法を推進する団体は企業の寄付などで運営されています。日本ではまだまだ育っていない分野なので、基金などでうまくまわっていくといいなと思います。音楽療法士は国家資格でもなく、これ一本で生活していくというのは、実際は厳しいです。

様々な方法論と純正律の可能性
玉木 音楽療法の本が楽器店にもたくさん並んでいますね。
芹澤 はい。『theミュージックセラピー』は発行して3年目になります。今では年に2回発行しています。その前に音楽之友社から北島京子さん(純正律音楽研究会(会員)の編集で『チャレンジ!音楽療法士』を発行しましたが、大反響でした。

玉木 それだけたくさんの方に心を持たれているということですね。しかし、この本を読んでも驚くのですが、音楽療法と一言でい

っても、色々なものがあり、幅広いですね。非暴力、ドメスティックヴァイオレンス(DV)に対処する音楽、なんていうのもある。芹澤 幕の内弁当状態です。整理がなかなかつきません。

玉木 ごく一般的に音楽療法というと、どんなものを指しますか。音楽療法には、こういう音楽を聴いた方がいいという、聴かせるやり方と、みんなで木琴やカステネットを叩いたり、声を出して懐かしい歌を歌うような、自らやる、二通りがあるように思いますが。芹澤 はい。前者を受動的音楽療法、後者を能動的音楽療法と呼んでいます。現在では、鑑賞する受動的音楽療法より、自ら演奏する能動的音楽療法の方が主流です。

玉木宏樹(左) 芹澤一美氏(右)

対象としては、発達障害を持たれたお子さんのグループや、高齢者施設などに、多く取り入れられています。精神科、ターミナルケアなど、医療の現場にも入りつつあります。

今回、交通事故で重い脳損傷を負った方のリハビリ病院を取材したのですが、その脳神経外科のお医者さんが言うには、音楽を聴くことに關して、人間の脳はタフであり、ネットワークが非常に広範囲にはりめぐらされているそうです。言語野は一箇所やられてしまうと失語症になるそうですが、音楽はどこかがやられてもどこかしら残って聴くことができるそうです。

玉木 失語症になって意志疎通ができなくても交響曲を何曲も書いた人もいますし。音楽というのは不思議なものです。

熊井(純正律音楽研究会会員) 音楽が自動車事故の予防にもなる、という面もあると思います。運転中に聴くといい、という方もいます。

玉木 信号待ちでいらいらしない、という声を頂いたことがあります。気持ち良くて寝てしまったいへんですが(笑)。

芹澤 音楽療法も、結果に対してどうするか、というだけでなく、予防や、今の元気をたもつ、残存機能の維持向上を目的に、という方向にも進んでいくと思います。

玉木 純正律というのは、今まであまり関心を持たれてなかった領域ではないかと思えます。

芹澤 純正律、倍音などのお話は、響き、音響に關わることですよね。その面も大事だと思えます。もつと研究していかないといけないと思います。懐かしい歌、好きだった歌に反応していくという情動の面に、現在の音楽療法は傾いています。

玉木 確かに、介護老人保健施設はまなすでも、以前は民謡や演歌、唱歌など流していたけど、純正律で落ち着いたといえます。福田六花先生がいうには、民謡など懐かしい歌を聴くと、皆さん盛り上がり活発になる、一方で純正律は静める効果があるので、昼と夜と使い分けるといいということでした。こういうことは、現場の声をひとつずつモデルとして吸い上げていかなないとわかりませんもんね。

ミントーンでハープセラピー
玉木 高田ハープサロンの高田さ

んのハープセラピーに取り組もうとされていますね。

高田(純正律音楽研究会会員) 旧約聖書のサムエル記の中に、今で言う鬱病にかかった王様に羊飼いのダビデがハープを聴かせて治癒したという記述があるくらい、音楽療法とハープは古くからかわりがあります。アメリカではハープセラピーが発達していて、私も今勉強中です。病気とは体のひずみだと思うので、ひずみのない和音、純正律がいいのは当たり前だと思っています。しかしアメリカでのハープセラピーもまだ純正律を取り入れているというのはいらないと思います。しかし方法論としては進んでいます。普通、お医者とは患者と一対一で対応します。アメリカでのハープセラピーも、みんな集めてやるようなことはなく、患者の呼吸、脈拍、個人の希望などあわせて対処しています。

玉木 私もまだ勉強中ですが、症状と教会旋法を対応させるというのにはやや疑問があります。しかし、ミントーンとハープでのミュージックセラピーはとても効果があると思います。(了)

文責 純正律音楽研究会事務局

平均律の普及の 思想的背景について (4)

純正律音楽研究会理事

黒木明彌

平均律が十九世紀後半以前に普及していなかったことの根拠に関して、「諸モード間の性格の違い」ということがよく取り沙汰される。ここではその「モードの性格」について説明してみたい。

例えば、ピアノの鍵盤を見てみると1オクターヴに十二個の鍵盤があるのがわかる。理論的には、平均律の場合、1オクターヴを1200セントという単位で表し、鍵盤を1つあがるごとに100セントずつ上がるとされる。どの鍵盤も平均的に100セント変化するが故に平均律なのである。となれば、「ド・

レ・ミ・ファ」という旋律を弾いた場合、音は「ド(200)レ(200)ミ(100)ファ」という具合に移動する。ドから始まるハ長調の旋律である。これをレから始めるニ長調に移動すると、「レ(200)ミ(200)ファ#(100)ソ(100)ラ#(100)シ(100)ド(200)レ」で、移調とはこの音間隔を平行移動するだけである。

これが不等分律となれば、こうはいかない。例えば、ヴェルグマイスター第1技法第3番を見てみよう。

ヴェルグマイスター第1技法第3番	
ド (90.225)	ド# (101.955)
レ (101.955)	ミ♭ (96.090)
ミ (107.820)	ファ (90.225)
ファ# (107.820)	ソ (96.090)
ソ# (96.090)	ラ (107.820)
シ♭ (96.090)	シ (107.820)
(平島達司、『ゼロ・ビートの再発見 技法編』, 2004-復刻版-, p.93)	

この音律で「ド・レ・ミ・ファ」というハ長調の旋律を弾いた場合、「ド(192.180)レ(198.045)ミ(107.820)ファ(107.820)ソ(107.820)ラ(107.820)シ(107.820)ド(192.180)」となる。これを移調してニ長調にすると「レ(198.045)ミ(107.820)ファ#(107.820)ソ#(107.820)ラ#(107.820)シ#(107.820)ド#(107.820)レ(198.045)」となる。つまりそれぞれに微妙に違った長調旋律が得られることがわかるだろう。

平均律では「ド(200)レ(200)ミ(100)ファ(200)ソ(200)ラ(200)シ(100)ド」という長調と「ラ(200)シ(200)ド(200)レ(200)ミ(100)ファ(200)ソ(200)ラ(200)シ(100)ド」という単調の二通りのモードしかなく、移調ということはこれら二つのモードを完全に平行移動することでしかない。対して、不等分律では移調するたびに同じ長調の間でもそれぞれ違ったモードが得られるのがわかる。これが「諸モード間の性格の違い」であり、平均律と不等分律を大きく区別されるものとされる。

P・バルビエリは「ベネチア地方では十九世紀の半ばには、オルガンの大部分は既に平均律

あるいは平均律を目指した整律に調律されていた」(Domènec Daver, 一九九〇、²⁹⁴頁)と断言している。それに対して、ドミニク・ドゥヴィは、十九世紀にこの地方で使われていた整律のひとつとしてデ・ロレンツィの整律を挙げ、更に『ガゼット・デ・ヴェニス』という音楽誌の「この整律は最も便利で完璧なものとして知られている。何故ならすべての音がハーモニーに満ちしかもそれぞれに特有の性質を保持しているからである。」(ibid.)というコメントを引いている。つまり「諸モード間の性格」を根拠に、平均律がまだ普及していなかったと断じているのだ。説得的である。

ただこの論法も完璧とは言えない。ジェラルド・ツワンクは『絶対音感』(一九八四)という論文の中で「平均律に調律されたピアノ」というのは神話にしかすぎない(22頁)と言っている。現代のピアノにおいてもそれぞれの音間隔は微妙に違っており、その違いがそれぞれの調性、モードに特有のエートス、感情的色彩を与えている(13頁)と主張している。となれば、「諸モード間の性格の違い」は必ずしも平均律が普及していることの証拠とはならない、ということになる。

標準。ピッチ考

音合わせの社会史

純正律音楽研究会代表

作曲家・ヴァイオリン奏者

玉木宏樹



世の「社会史」は純正律的な観点から
も非常におもしろい。

十七世紀末頃の主に宮廷オーケ

ストラにはいろんな服務規定があ
ったが、一六九八年に作曲されたあ
る組曲の序文に、ちゃんと調弦せよ、
うるさい前弾きを謹むこと、等と書
かれている。前弾きとは調弦が終わ

っているのに、めいめいが勝手なパ
ツセージをガチャガチャ弾きまく
ることで、この悪習は現在でも改ま
ってはいいない。一七五〇年頃になっ
ても、音合わせの仕方は書かれてあ
ってもいわゆる標準ピッチはなか
ったので、音合わせは各オケで統一
されておらず、ましてやA \parallel 四四〇
なんてことは絶対になかった。それ
どころかAで合合わせたかどうかも
定かではない。この「A」で合わせ
るということが、いつ頃からから誰

ン（聖歌隊ピッチ）とカンマーター
ン（宮廷ピッチ）という二種類の設
定があり、これらの差は時には一音
半にも及んでいた。

ペトゥリの一七六七七年の「音楽実践
入門」からとてもおもしろくて重要
な所を引用しておこう。

「ヴァイオリンの奏者たちは家を
出る前にケースの中の楽器を点検
し、弦が切れていないかどうかだけ
でなく、調弦も試しておくべきであ
る。というのは、音楽が演奏される
場所が半音高いのか低いのかを知
っておけば、その場で調弦を大きく
変えずに済む。弦は常に伸びて低く
なるので、その高さに突然引っぱら
れれば、糸巻きが元に戻ってしま
う。」

「ヴァイオリン奏者が初めにD線
を合わせて、全員が同じD音となっ
てから、D線にしたがって他の線を
合わせるのと同じように」

この後者の文章に見るように、ヴ
ァイオリンですら、Aではなく、D
で合わせていたようだ。もうひとつ、

マーリンクの本文から重要な部分
を引用しておこう。

「十八世紀末頃のピッチは地域的
に見て大ざっぱに三つに分けるこ
とができるかも知れない。ベルリン
ドレスデン、ライプツィヒあたりが
最も低く、パリやロンドンが中間で
ヴィーン、ペテルブルクなどが最も
高かった。そしてほぼ一八三〇年頃
この高いピッチと中間のピッチが
ひとつになり、高いピッチと低いピ
ッチとの差だけとなった。しかしそ
の差もかつてのようにそれほど大
きなものではなく、それほど見て良
いだろう。一八三八年に刊行された
シリングの大部の『音楽百科事典』
にある音律 (Stimmung)」という
項目には次のような一節があ
る。：しかしカンマー・トーンの
ピッチもどこでも同じというわけ
ではなく、違いはそう大きくはない
としても、なおあることはある。ま
た広範囲に用いられているピッチ
というものはない。したがってヴィ
ーン、パリ、ベルリン、ドレスデン
等々

私は最近、オーケストラの歴史を
再考するため、「オーケストラの社
会史」(マーリンク、大崎滋生共著・
音楽之友社)を購入して読んでい
るが、十八世紀から十九世紀頃のドイ
ツのオーケストラ事情を多くの歴
史本、音楽新聞を引用しての時代考
証なので、現代での格式高いオーケ
ストラからは想像もつかないドタバ
タぶり(今でも共通する人間性の
部分は多い)に、大いに笑いつつ、
身につまされるものがある。まだ斜
め読みの段階だが、中でも「音合わ

のピッチという言い方をしなければならぬ。」

統一的なピッチを求める運動は、特にオペラ歌手から強く望まれたが、なかなか実を結ばなかった。

「輝かしい音が得られるためにより高いピッチを好んでいた巡業するヴィルトウオーゾの影響によって、カンマー・トーンはつねに高くなっていき、これはとりわけオーケストラ付きの声楽曲の演奏に深刻な影を落としていったが、一八二〇年を過ぎてようやく、統制せざるを得ないと感じられるようになっていった。この努力の具体的成果を最初に生んだのはパリであった。一八五八年から五九年にかけてのピッチに関する会議において、科学アカデミーの提案に基づいた、a₁₁四三五が採択され、一八五九年二月一六日配布の法律においてこれはフランス全土を拘束することとなった。当時のピッチの中で中間値であったこの

新しいピッチはドイツでも数年のうちには多くのオーケストラで受け入れられていった。その際、とりわけ南ドイツ各地のオーケストラは、ウィーンの宮廷オペラがどんな態度を取るのかを、まずは見守った。この事実は、その頃ウィーンが音楽界にどれほど大きな影響力を持つようになっていたかの証左である。当時のウィーンの音楽事情を信頼できる目撃者であるハンズリックがその導入を一八六二年としている」

次回もこの本のおもしろい箇所を紹介してみよう。



音楽之友社『オーケストラの社会史』
※絶版のため入手困難ですが、古書店やアマゾンなどに少し出ているようです。

連続エッセイ
外科医のうたた寝 第十四話

ホノルルマラソン

純正律音楽研究会理事

福田六花(医学博士 作曲家)

マラソンを始めて十年になるが、昨年末に雑誌『Tarzan』(マガジンハウス)の創刊二〇周年企画でホノルルマラソンを走ることになった。半年前から雑誌の連載が始まり、練習の様子などが定期的に『Tarzan』(マガジンハウス)に掲載されていった。

十二月十一日ホノルルマラソン当日、スタートが午前五時と早いので三時間前の午前二時に起床した。おにぎり三ヶと豆大福を食べホテルからバスに乗ってスタート地点に移動し、二万五千人のランナーがひしめき合いながら四二・一九五キロの旅が始まった。

スタートと同時に大きな花火がホノルルの夜空に広がり、その後はクリスマイルミネーションがきれいなダウンタウンを走る。十八キロからコースはハイウエーとなり、徐々に陽が昇り美しい夜明けの海を眺めながら走り続けた。夜が明けると気

温が上昇し始め、三〇キロ過ぎからは三〇度を超える暑さに苦しめられた。

給水所で大量のドリンクを飲み、持参した高カロリーゼリーで栄養補給しながらゴールのカピオラニパークに到着した。三時間二〇分二八秒、二万五千人中三七六位でのゴールであった。

マラソンの日の夜、ホノルルの街はオレンジ色のフィニッシュシャツを着たランナーで溢れかえっていた。

*ホノルルマラソンの詳細が一月十八日発売『Tarzan』(マガジンハウス)に掲載されました。



何故か、とある公民館でコンサート紛争に介入したNATOの空爆を支持するスーザン・ソクタグの文章を購読・解説することになり、改めてこの地域に関する本を読んでいる。もともと僕は、サッカー、音楽や映画など、旧ユーゴの文化が大好きである。映画監督で言えば、鬼才デューシャン・マカヴェイエフ、それから『アンダーグラウンド』

で有名なエミリー・クストリッツァ。独特の暑苦しいギャグセンス、明らかに異化効果を目指している劇中劇や劇中音楽の使い方など、その独特の手法にぞっこんだと言っても過言ではない。そして『アンダーグラウンド』の音楽と云えば、ゴラン・ブレゴヴィチ率いるノー・スモークキング・オーケストラである。画面上所狭しと動き回るヴァイオリニストとブラスバンドの活躍ぶりを思い起こされる方も少なくないであろう。

というわけで、旧ユーゴのブラスがもっと聞きたい、と思っ

て買ってみたのがこのアルバムである。何と日本版。正確に言うと、輸入版に日本語の解説を付けている。

その解説を読むと、彼ら、南ユーゴスラヴィアの出身らしい。ということは例の紛争地域コソヴォと接する場所である。案の定、コソヴォ紛争を待つまでもなく、一九九五年のボスニア内戦の時点で、彼らの消息は途絶えていたらしい。もともとブラスの演奏が盛んなところと言うが、このような楽団の起源はやはり軍楽隊と婚礼のための楽団が組み合わさって出来たらしい。かつて平和な時代にはブラスバンドのフェスティヴァルが開催され、たくさんのバンドが技を競ったと言う。

上手い。ただ、ハーモニーに關してもさるものながら、特に面白いのがリズムである。独特の十六ビートに乗せて、和音が長三度を奏でているにもかかわらず、何とも言えないマイナー系のメロディが疾走する。とに

かく上手い。何せ、バルカンの音楽と言えばその狂ったような変拍子で有名である。サッカーなどでも、例えば、ストイコビッチの摩訶不思議なドリブルなど独特のリズム感に裏打ちされているように思える。複雑なフエイントを入れるでもなく、ただひたすらに裏の拍子のタイミングで駆け抜けるのだ。僕はそのサッカースタイルには、彼らが生活の中で親しんでいる音楽が多なる影響を与えているものと密かに確信している。

彼らは、また、金管とは思えない早いパッセージをこともなげに吹きこなす。マルセイユにノー・スモークキング・オーケストラのライヴを観に行った時、映画でもお馴染みの超技巧変態曲芸ヴァイオリニストが、他人に持たせた弓に楽器を擦り付けるようにして早弾きを披露していたのを時々思い出すのだが、このアルバムでは、そのメロディをトランペットが軽々と吹きこなしているのである。

純正律イベントレポート

05年09月19日(月・祝)

アタパラカフェ(静岡県熱海市)

「純正律をヴァイオリンとアイリッシュハーブで、そして花火の夕べ」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)・高木真理子(アイリッシュハーブ)*ミントーン

熱海の別荘地の高台にある喫茶店アタパラカフェ主催のコンサート。正会員常重一志さんの紹介により実現しました。瀟洒な佇まいで、熱海の町が一望でき、素晴らしいロケーション。前半は、主に純正律の説明。後半はミントーンハーブとヴァイオリンのデュオでモーツァルトを中心に演奏。演奏終了後、熱海市の花火大会を見るところ

企画に合わせて、この日のために編曲したヘンデル「王宮の花火の音楽」から「歓喜」を最後に演奏しました。休憩して花火大会が始まると、たいへんきれいで、山にかかった中秋の名月とともに素晴らしい景色を満喫できました。

05年11月20日(日)

ケアハウス万葉の杜 展望ラウンジ(富山県氷見市朝日)

純正律の響き バイオリン演奏会「やすらぎのひととき」

出演|| 玉木宏樹(ヴァイオリン)

純正律の風鈴製作に取り組んでいらつしやる高岡の小泉製作所社長小泉俊博さんによる企画。前日には、玉木と小泉さんがFMたかおかに出演。パーソナリティ車吉章さんとともに談笑をまじえながら純正律の話をして1時間たっぷり楽しくお届けしました。当日のコンサ

サートは、氷見市のケアハウス「万葉の杜」のとても眺めの良いラウンジで、司会にFMたかおかの中川和津代さんを迎え、利用者の皆さん、近隣の皆さんにお集まり頂きました。地域の皆さんにとってもあたたかく迎えていただきました。またぜひお伺いしたいです。

05年11月26日(土)

フレンズ(東京都港区)

ピュア・ミュージック・サロン 土曜のお茶会

第1部 CD「ピュアスケール ミュージックによる理想的ストレス解消」鑑賞

第2部 座談会「純正律の可能性を探る」

当会主催のお茶会、今回は玉木宏樹が十三年前にソニーから出した純正律のCDの鑑賞とその制作秘話、音楽療法について音楽之友社『theミュージックセラピー』編集長の芹澤一美さんとの対談、前号の会報でも紹介した磯田秀人さんプロデュースによるクリスタル・ボウルのCD『倍音浴』の紹介、正会

員高田明洋さんによるハーブセラピー計画の話等々、いつもとは違う趣向で開催、好評を得ました。以下、正会員八木澤亨さんによる報告です。

バッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタの演奏に始まり、おしゃべりヴァイオリン、参加者の名前に応じた即興の作曲と続いた後、CDによる音楽鑑賞。会報で紹介されたCD「クレールランド」よりペレツイースの「Meeting with a friend」、その他レオナン・ペロタンや古楽風の声楽曲(女声ソロ、女声二重唱、四重唱)を聴かせて頂きました。さらに、純正律音楽制作の原点に帰るといふ意味を込めて、玉木氏が十一年以上に出したCD「ピュアスケールミュージックによる理想的ストレス解消」(廃盤)が紹介され、そこに収められた「野ばらに寄す」(マクダウエル)、「賛美歌第94番」、「森の小鳥」(ドップラー)、「木々に舞う妖精」(玉木)、「マスカレード」(レオン・ラッセル)、「アヴ

エ・マリア」(バッハ「グノー」)を鑑賞させて頂きました。濁りの無いハーモニーは、聴く者の心に安らぎを与えてくれるようです。なお、「アヴェ・マリア」の収録に際しては、共演した「オルケストレ・ラ・ソン・パウ」

の面々に各自セカンドの弦楽器を持参させ、それらを綿密な計算のもとに調弦した上で、彼らには開放弦でのみ演奏させるという斬新な手法をとったそうです。弦楽器は弾いているうちに弦の張力が変わってくる事が多い為、録音の途中で何度も調弦をやり直す苦労があったようですが、演奏中、弾いていない筈の弦が周囲の音に共鳴して勝手に鳴り出しナチュラル・エコーを生むという驚くべき現象を体験されたそうです。

この他、純正律によるミュージックセラピーの効果に関するお話もありました(これについては本誌10・11頁をご参照下さい)。

05年12月18日(日)

割烹うさの(東京都渋谷区)

純正律ミニコンサート

出演 玉木宏樹(ヴァイオリン)

以前、当会の幹事を務め、現在は表参道の割烹「うさの」の女将として1周年を迎えられる田口三江子さんの企画によるミニコンサート。お集まりいただいた皆さんは少人数ながらも、とても熱心に聴いて頂き、終演後の懇親会も盛り上がりました。

05年12月23日(金・祝)

四谷・コア石響(東京都新宿区)

「純正律のクリスマス ガラ!? コンサート」

出演 玉木宏樹(ヴァイオリン)・水野佐知香(ヴァイオリン)・高木真理子(アイリッシュハーブ*)吉原佐知子(箏**)

*ミントーン **純正律

一年の感謝の気持ちをこめて、玉木宏樹を中心にいつもご出演

いただいたというヴァイオリンの水野佐知香さん、ハーブの高木真理子さん、お箏の

吉原佐知子さんとともに盛り沢

赤坂カーサクラシカ(東京都港区)

「心に体にやさしい透明な響きにつつまれる 純正律の夜」

出演 玉木宏樹(ヴァイオリン)・高木真理子(アイリッシュハーブ*)ミントーン

クラシック専門ライブハウス、カーサクラシカに出演。12月20日オーブンのクラシック専門ライブハウスで、お酒を飲みながら気軽にクラシックの生演奏が楽しめ、演奏中でも入店も飲食、オーダーもできます。生でクラシックを聴きたいけれど、堅苦しいコンサートは苦手という方にはうれしいスペースとなりそうです。都心にありアクセスも良いので、好評であれば、定期的に出演していきたい、純正律を聴けるスポットとして定着させたいと考えています。一晩に3ステージあるので大忙し。三十名程度の会場は満席で、大盛況でした。

06年1月21日(土)

花かげホール(山梨市)

「純正律の講演&コンサート+タンゴの夕べ」

05年12月28日(水)

山のコンサート。まずは玉木宏樹と水野佐知香さんのデュオヴァイオリンでモーツァルト。やはり交響曲第40番が好評。玉木宏樹がヴィオラに持ち替え、新曲「踊るサチカ」を披露。とても演奏が難しい曲ですが、たくさん拍手を頂きました。次にお箏の吉原佐知子さんと玉木宏樹の演奏で純正律の自作曲『クロノスの彼方』と新曲『虹のクロノス』を演奏。休憩後は、高木真理子さんのミントーンハーブとヴァイオリンで、モーツァルトやオリジナル曲を数曲演奏。最後に全員で「聖夜」を演奏、会場の皆さんにも歌って頂きました。

出演 玉木宏樹(ヴァイオリン)・小松真知子(ピアノ)・福田六花(ボーカル & ピアノ)

やまなし有機農業市民の会主催のコンサートです。花かげホールは小規模ながらも音響がよく、ピアノは響きの良いベーゼンドルファーがあり、大変人気が高いホールです。前半は純正律を主に、後半はタンゴを中心にお届けしました。河口湖在住でこの会とはかねてから親交の深い福田六花先生も参加して、



りました。

玉木宏樹とのジョイントでなんとスマップのライオンハートなどを披露。玉木と小松さんによる息のあった楽しい演奏では、冗談音楽、タンゴの名曲から、玉木宏樹オリジナルの『天の川』などもお聴き頂き、盛り沢山のコンサートとな

06年1月29日(日)
カキヌマ(東京都港区)

純正律ミニコンサート
出演 玉木宏樹(ヴァイオリン)・高木真理子(アイリッシュハープ*) *ミニトーン)

先月の割烹「うさの」のミニコンサートにご来場下さったアーティストトマネージメントを手掛けるル・レーブの松岡直子さんの企画により、南青山の素敵なフレンチレストランでのコンサート。ミニトーンのアイリッシュハープの音程もとても安定していて、楽しいコンサートとなりました。

06年2月5日(日)

布池文化センターコンコーディアルホール(名古屋市)
「公開講座(革命的音階練習ワークシヨップ)&ミニコンサート(純正律でモーツアルトを)」
講師 玉木宏樹・出演 玉木宏樹(ヴァイオリン)・高木真理子(アイリッシュハープ*) *ミニトーン

本年2月、レッソンの友社より玉木宏樹著「革命的音階練習」



が出版されました。この革命的音階練習のワークシヨップと、ヴァイオリンとミニトーンハープとのミニコンサート

が、弦楽器指導者協会中部支部の主催で開催されました。レッソンの友社『ストリング』青木編集長も同行し、同誌2006年3月号でこの模様が紹介されました。正会員で、セントラル愛知交響楽団の岡田進司さんにもご協力頂きました。革命的音階練習は、受講者の皆さん、たいへん刺激を受けていた様子でした。後半は打って変わって純正律の説明を交えながら、ヴァイオリンとアイリッシュハープの演奏をお楽しみ頂きました。

06年2月19日(日)

有機村(山梨県甲府市)
「美しいコーラスのために」
純正律によるハモリのワークシヨップ&ミニコンサート」
講師・出演 玉木宏樹

正会員相良京子さんの主催。受講者は約二十名、そのうち結婚式場で聖歌隊をやっているというコーラスグループの皆さんは、日頃ピアノで音程を取っているとのこと。純正律との出会いは衝撃が大きかったのではないのでしょうか。ハーモニートレーナーで純正律のデモや、今の世界のコーラス状況におけるいろんなCDを聴いてもらっているうちに段々と何かが違っていることに気がつき始めた参加者の皆さんの驚きは、ハーモニートレーナーを実際に手にし、純正律と平均律の違いを体で実感することによって一層大きくなったようでした。そして、いよいよハモリの実地指導。日本のコーラスの大半はまっすぐ横に並び一斉に前に向かって声を出すため、ほとんど回りの人の声を聞いていないといえます。アンサンブル、特に純正律でハモ

るためには他人の声を聞きあわなければ絶対に成り立ちません。そこで、3人ずつ輪になりドミソを歌う練習をしました。一人がドを延ばし、完全5度のソの人がそれに乗っかり、うまくハモったところにミを入れ、順にドミソの位置を交換していきま

06年2月

す。これがハモリ練習の原点です。このような練習は皆さん初めての経験のようでした。次に玉木宏樹作曲の数曲のカノン（輪唱）を歌う練習。これも周りの音を聴き、自分の音程をとる訓練になります。休憩を経て、ヴァイオリンのミニコンサートをお楽しみ頂きました。このような形でワークショップも今後また開催していきたいと思

26日（日）

科学技術館サイエンスホール

（東京都千代田区）

「マクロビオティック医学シンポジウム」

講演Ⅱ福田六花「純正律音楽で老人の徘徊、不穏が減った！老人保健施設における純正律音楽の効用」・玉木宏樹「純正律ヴァイオリンの生演奏 聴くだけで全身百兆の細胞が共鳴する」他

マクロビオティック医学研究会、日本C1協会による講演会。まずは福田先生が、純正律の説明と認知症に効果があったという話を、つづいて玉木が、ハーモニートレーナーによる純正律と平均律の比較とヴァイオリン演奏。短い時間ながらも熱心な受講者の方に興味を持っていただくことができました。

06年2月27日（月）

赤坂カーサクラシカ（東京都港区）

「心に体にやさしい透명한響きにつつまれる 純正律の夜 V O L ・ 2」

出演Ⅱ玉木宏樹（ヴァイオリン）・高木

真理子（アイリッシュハープ*）*ミーン トーン

2回目となる今回も満員御礼、たくさんの方々にご来場頂きました。今回は、1ステージの時間を長くして2ステージ制にゆっくりたっぷり楽しんで頂けたのではないかと思います。ヴァイオリン無伴奏『桜変奏曲』、峰咲マユさんの委嘱作品『第三の夢』、お箏とヴァイオリンのための『虹のクロノス』を、ヴァイオリンとアイリッシュハープで新しく編曲したものを初披露。大好評でした。

ご来場の皆さま、ご協力いただいた皆さま、誠にありがとうございました！

